

## 系統別歌舞伎戯曲解題

渥美清太郎

〈出典：『系統別 歌舞伎戯曲解題』下の一、独立行政法人日本芸術文化振興会、平成 23 年 1 月〉

**トウヤマセイダン**（遠山政談）。世話物。天保期、江戸北町奉行となった遠山左衛門尉は、若い頃下層に放浪して市井の事情を知っていたため、名奉行の名をとり、腕に刺青があるという噂で一層名高くなった。柳亭種彦の小説「誂染遠山鹿子」はこれを当て込んだのであるが、奉行所から叱責されて、「逢山鹿子」と直した。

**ジンセイ、ホマレノキキガキ**（仁誠誉聞書）。重扇助作。一八六八（明治元年）四月、大坂堀江芝居演。これが劇化の初め。小間物屋の娘お菊（片岡銀杏丸）と大工金神の伊三郎（嵐和三郎）とは恋仲で、或る晩、塀を三つ叩くのを合図に、下女おとせ（山下里紅）が伊三郎を引入れる約束をしていたところ、間違って俱梨迦羅白太郎（中村梅若）を引っ張り込んでしまい、白太郎がお菊に意見をすることなどがあった。伊三郎は金のことで失敗し、兄の百姓伊八（松本染五郎）の許に隠れたので、お菊はおとせを連れて跡を追ったが、かねてお菊に惚れていた両面藤三郎（嵐虎友）が、根岸のお行の松で待ち受け口説く。お菊がきかないので遂に二人を殺す。その罪は伊八にかかり、そのため伊八の女房おとく（中村芝雀）が藤三郎を色仕掛けにするなどの事があり、遂に根岸伊前守の裁判になった。然るに伊前守は、白太郎が出世した奉行であって、藤三郎の旧悪を知っており、腕の彫物を見せて詰問するので、遂に藤三郎も恐れ入るまで。つまり遠山は余りに近い人物であったため、根岸肥前守に仮托したのであったが、再演から遠山に直した。そのくせ名題は

**ツギカヘテ、ネギシノイシツエ**（接木根岸礎）の方が行われている。塀を三つ叩くことは、「けいせい染分総」の三吉をそのまま取ったのであり、その他も小劇場らしい、まともな脚本であるが、大正期まで行われていた。脚本は、日本戯曲全集「探偵狂言集」に在り。

**ナニタカキ、ホリモノセイダン**（音立喜彫物政談）。これは、一八七五（明治八年）五月、東京喜昇座演。黙阿弥の『梅雨小袖昔八丈』へ本筋を結びつけたもので、くりから金太郎（坂東鶴蔵）を弥太五郎源七（屋上尾上右衛門）の子分とし、これが後に遠山になって、新三を殺した源七を裁く筋で、大岡越前守を遠山左衛門尉へ持ち込んだのである。

**トオヤマザクラ、テンポウニツキ**（遠山桜天保日記）。一八九三（明治二十六年）十一月、東京明治座演。竹柴其水作。これは、当時有名だったピストル強盗清水定吉を当て込んだ狂言である。浪士生田角太夫（市川左団次）は常に短銃を放つて悪事を働き、按摩電庵に化けて家尻を切り、女房お元（市川升若）に諫められてこれを殺し、手先若蕙の目吉（市川寿美蔵）に捕えられ、自身番で調べられても白状せず、再び逃走したが、新潟行形亭で茶道具屋善兵衛に化けていた所を襲われ、遂に縄にかかる。尾花屋小三郎（市川小団次）は清元の師匠延若（中村福助）といい仲だったが、洲の崎政五郎（市川猿之助）の意

見で別れなければならなくなり、思いつめて隅田川で情死する。そこへ来合わせた僧の佐島天学（市川権十郎）は、追い落とし間違えられ捕縛されたが、口惜しさのあまり破獄し、角太夫と共に悪事を働き、のち与力の株を買って藤村浦太となり、自身番で角太夫を調べたが、角太夫に怒鳴られて旧悪露頭、再び捕えられる。小三郎延若も助かり、小三郎は祐天小僧小吉という遊び人になり、政五郎を強請ったが、のち改心して自訴し、延若は吉原久喜万字の若紫となって、遠山に調べられる。旗本遠山金四郎（二役左団次）は長唄の唄うたいとなって放蕩をつくし、母妙貞（中村寿三郎）妻お貞（二役升若）を心配させたが、実は下情に通じるための方便と明し、のち北町奉行遠山左衛門尉となって、天学小吉の事件を裁く。小吉が夢に祐天（二役小団次）となり、不動明王（九代市川団十郎）の剣を呑むと見るくだりもあり、小三郎延若が情死のくだりへは、清元

ソノウワサ、タツヤアダナミ（其噂立仇浪）を使った。むやみと目先の変化のみ多く、内容貧弱な脚本であるが、大衆受けがするので度々再演された。脚本は日本戯曲全集「新七及其水集」に在り。

カタキウチ、<sup>※ゴジインガハラ</sup>ゴジインガワラ（敵討護持院ケ原）。一八九九（明治三十二年）一月、東京歌舞伎座演。福地桜痴作。これは弘化期実在の仇討一件へ結びつけたもの。鳥居甲斐守の用人本庄茂平次（五代尾上菊五郎）は、恩ある<sup>※木部玄斎</sup>木部玄斎（四代尾上松助）を闇打ちにして、その遺族を欺き、のち雑司ヶ谷で玄斎の娘おとせ（坂東秀調）の夫熊谷伝十郎（七代市川八百蔵）と、その弟伝之丞（市川染五郎）を返り討にまでしたが、女房お千代（中村福助）が自殺しての諫めに改心、おとせとその妹おきん（尾上栄三郎）、弟<sup>※五太郎</sup>源太郎（尾上丑之助）が、小松左膳（中村時蔵）に助けられ、護持院ケ原に待ち受けているに出会い、覚悟して討たれる。人入れ若狭屋の三五郎（二役松助）は、茂平次に荷担して悪事を助けたが、そこに居候の殿様金太（二役菊五郎）は、実は遠山金四郎で、矢部駿河守を裁き、恐れ入らせる。傑作とはいえないが、天保改革の世相など描いてあって、おもしろい所もある。脚本は当時、単行本で発行された。

テンボウエンゲキシ（天保演劇史）。一九三〇（昭和五年）一月、東京歌舞伎座演。岡本綺堂作。これは、江戸の劇場が日本橋から浅草へ移転させられた事件を脚色したもの。前年火事で焼けた中村座は再築を許されず、中村勘三郎（七代沢村宗十郎）はじめ一同憂慮、尾上栄三郎（市川松蔦）は芝居取潰しの噂を伝えてくる。火事の責任を負った楽屋番の利兵衛（市川猿之助）は半狂乱になっている。事実、天保改革に際し、老中水野越前守（七代市川中車）は、劇場取潰しを考え、南町奉行の鳥居甲斐守（七代松本幸四郎）もそれに賛成したが、北町奉行遠山左衛門尉（市川左団次）は、若いころ芝居に遊んでいた縁もあるので、これに反対し、その結果は浅草へ移転ときまったのである。当時の浅草は日本橋に較べれば僻地だから、芝居者は落胆したが遠山はその場へ来て演劇不滅を説き大いに激励、坂東彦三郎（十五代市村羽左衛門）も一同を鼓舞し、勇んで移転することにきまるとまで、これに利兵衛の娘お竹（市川松蔦）と道具方伊之助（市川莚升）の淡い恋を添えてある。綺堂晩年の枯れた筆致で、これだけの事件を興深く描き、大勢の役者を活躍さ

せ、遠山に、水野と鳥居と芝居者と三様にセリフの使い分けをさせる大芝居もあり、まことに傑作というに憚らぬ。脚本は「綺堂戯曲集」第十四巻に在り。